ねこのしっぽ　（ポルトガル）

昔むかし、ずうっとむかし。

あるところに、すてきな雄ねこがいました。

あるとき、ねこは、散髪屋に行きました。散髪屋は、はさみでねこの口ひげをチョキチョキしているとき、すばらしく長くてふさふさした、ねこのしっぽに気が付きました。

そこで、

「ねこの旦那、すてきなしっぽをお持ちですね。でも、もう少し短かったら、もっとすてきだと思いますがね」といいました。ねこは、それはいい考えだと思って、しっぽを少し切ってもらうことにしました。散髪屋は、しっぽの一番いい所をすっぽり切ってしまいました。

ねこは、前よりすてきになったと思って、たくさんのお金をはらって、店を出ました。町を歩いて行くうちに、ねこは、切ったしっぽの残りを散髪屋にやることはなかったと、思い付きました。そこで、走ってもどって、散髪屋にいいました。

「ぼくのしっぽを返してよ」

すると、散髪屋は、

「しっぽはすてちゃったから、返せないよ」と答えました。ねこは、

「じゃあ、代わりに、あんたのかみそり*を一本いただくよ」といって、かみそりを一本取って、店を飛び出しました。

ねこは、かみそりを手に入れて、ごきげんで歩いて行きました。すると、魚屋のおかみさんが、かごに魚をいっぱい入れてやって来ました。ねこは、おかみさんがほうちょうを持っていないのを見ると、

「おばさん、魚を料理するのに、このかみそりをあげるよ」といって、さっきのかみそりをわたしました。おかみさんは、大よろこびでお礼をいいました。

ねこは、ぼくはなんて親切なんだろうと思って、ごきげんで歩いて行きました。

しばらく行くうちに、ねこは、あのおばさんは、かみそりのお礼に魚をいっぴきくれたってよかったのにと、思い付きました。そこで、走ってもどって、おかみさんにいいました。

「魚をいっぴき、お礼におくれよ」

すると、おかみさんは、

「これは売り物だから、あげられないよ」と答えました。ねこは、

「じゃあ、かってにいただくよ」といって、かごから魚をいっぴき取って逃げ出しました。

しばらく歩いて行くと、水車小屋の前で、まずしい*粉ひきが、ひからびたパンを食べていました。ねこは、気の毒になって、

「この魚もお食べよ」といって、粉ひきに魚をやりました。粉ひきは、よろこんでお礼をいいました。

ねこは、ぼくはなんて親切なんだろうと思って、また、ごきげんで歩いて行きました。

しばらく行くうちに、ねこは、お腹がすいてきて、あの魚は、ぼくが食べればよかったなと思いました。そこで、走ってもどって、粉ひきにいいました。

「ぼくの魚を返しておくれよ」

「もう食べちゃったから、返せないよ」

「じゃあ、あんたの粉をひとふくろいただくよ」

ねこは、小麦粉のふくろをかついで逃げ出しました。

なおも歩いて行くと、小さな学校がありました。子どもたちがお腹をすかせていたので、ねこは、先生に、

「この小麦粉で、おかゆをこしらえて食べさせてよ」といって、小麦粉をふくろごと、あげました。

たいして行かないうちに、ねこは、小麦粉をぜんぶあげて、もったいないことをしたなと思いました。そこで、走ってもどって、先生に、

「ぼくの小麦粉を、ちょっぴりでいいから、返しておくれよ」といいました。

「もうおかゆにして食べちゃったから、返せないよ」

「じゃあ、あんたの生徒をひとりもらって行くよ」

ねこは、女の子をひとりつかまえて、逃げ出しました。

ねこは、女の子を負ぶって歩いて行きましたが、重くてめんどうになってきました。

すると、せんたく屋があったので、ねこは、入って行っていいました。

「この子をあげるから、手伝いさせるといいよ」

せんたく屋のおばあさんは、年を取ってくたびれていたので、大よろこびしました。

ねこは、また、ごきげんで歩いて行きました。けれどもじきに、あんないい子をあげたんだから、お礼をもらわなくちゃと、思い付きました。そこで、走ってもどって、

「お礼にシャツを一枚おくれよ」といいました。

「これはわたしのシャツじゃないんだよ。あずかり物だから、あげられないよ」

「じゃあ、かってに一枚もらって行くよ」

ねこは、シャツを一枚取って逃げ出しました。

しばらく行くうちに、ねこは、シャツを持って歩くのがめんどうになってきました。ちょうどそこへ、角を曲がって、まずしいバイオリンひきがやって来ました。バイオリンひきは、着ている物が、ぼろぼろでした。ねこは、

「このシャツをあんたにあげるよ」といいました。

バイオリンひきが着てみると、シャツはぴったりだったので、大よろこびしました。

ねこはそのまに、バイオリンをつかんで逃げ出しました。

バイオリンひきは、もう、バイオリンをひいて旅をするのはいやになっていたので、バイオリンを取り返そうとは思いませんでした。そして、商売を始めると、とてもうまくいきました。まずしかったバイオリンひきは大金持ちになり、大きなお屋敷に住んで、幸せに暮らしました。

さて、ねこは、となりの村まで来たときには、すっかりお腹がすいていました。そこで、バイオリンをひいてお金をかせごうと思いました。

ねこは、宿屋の前で、バイオリンをひき始めました。とてもじょうずでおもしろい音楽だったので、みんな大よろこびしました。ひき終わって、ねこがぼうしをぬぐと、みんなは、ぼうしの中にお金をざらざら入れてくれました。

ねこは、うれしくて、それからのち、せっせとバイオリンの練習をしました。やがて、ねこは、有名なバイオリンひきになって、あちこちのお城にまねかれ、王さまやお姫さまにかわいがられましたとさ。

おしまい

原話：『新編世界のむかし話４』山室静編著／文元社

再話：村上郁